

趣旨説明

前田 專 學

創設四〇周年を迎えた比較思想学会は、前後三回を通じての共通プログラムとして、日本の比較思想研究に貢献した先人を取り上げ、その思想の検討を行ってきた。三年目を迎える本年は、その完成年として、本学会の創設者であり、日本の比較思想学の確立者である中村元博士の思想を取り上げることとなった。

折しも、本学術大会の開催機関である公益財団法人中村元東方研究所は、「中村元記念館」の創設、日本印度学仏教学会学術大会の開催など、三年間にわたる中村博士の生誕一〇〇年記念事業を推進中で、この度の比較思想学会学術大会を、その記念事業の掉尾を飾るものとして位置づけ、特定非営利活動法人中村元記念館東洋思想文化研究所とともに共催することとなった。

さて、グローバル化が急速に進む現代社会におい

て、民族や文化、あるいは思想、宗教間の理解の必要性は、日々増大しているが、しかしそのような急激な社会変動によって引き起こされる各種の摩擦や紛争の解消に大きな役割を果たし得る比較思想への関心は、決して高いとはいえない。なぜだろうか？

比較思想研究は、研究対象としての領域の広さや深さ、さらには複雑なテーマを扱うという点で、一般的な思想研究以上に高い理想と、高度な目的意識を持たなければ、容易に成し遂げられない難しさを持つ学問領域である。それ故に、その重要性は理解されながらも、具体的に比較思想に取り組むという事になると、敬遠されてしまうのかもしれない。

そこで、比較思想の重要性を確認し、より魅力的な学問へ発展させるためにも、比較思想の原点に帰る必要がある。その意味で、常々「私は比較思想の発展のための一歩槍となります」

と仰っておられ、事実その六〇年にも及ぶ学究生活において、それを見事に実践された、日本の比較思想学の原点ともいうべき中村元博士の比較思想を学ぶことは、比較思想学の将来的発展のために、大きな意義があると確信する。

中村比較思想の原点ともいえる『宗教における思索と実践』（昭和二四年毎日新聞社、新版は平成二一年サンガ）には、中村元博士の研究意図と決意が明確に記されている。中村元博士は同書に於いて、戦争への深い反省と仏教精神による平和社会の構築のための精神的な支柱として、「仏教の『慈悲』の思想」に着目され、これを深くかつ広く検討された。一方で、偏狭な国粹主義思想が、日本を悲惨な戦争に駆り立てた一因となつたとの反省から、公正かつ広い視野からの思想研究の必要性を強く説かれている。そして本著作の発展形として、今日の比較思想学の基本文献ともいえる『東洋人の思维方法』や『普遍思想史』は、著されたといつても過言ではないであろう。つまり、中村比較思想の根本には、慈悲の思想があつたと言い得よう。しかも、その慈悲の思想は、民族、文化、宗教の差異を超えて、互いに和らぎ、助け合う共存共栄の社会の実現のための基礎理論への拡大という社会理論さえ射程に入っている。中村元博士は、この「慈悲の思想」の探求のために、多種多様な比較思想研究を行ったとさえ言い得るのではないか。そして、この「慈悲の思想」を他の言葉に置き換えれば、「共存共栄の思想」となるのではないか。

以上のような観点から、今回のシンポジウムでは「共生の思想―中村元の『慈悲』の思想をてがかりに―」と題して、シンポジストの各先生に専門家の立場から、中村比較思想学を検討していただくとともに、比較思想の新たな地平の開拓のために、積極的な議論を展開していただきたいと考えている。

シンポジストは、春日井真英氏（東海学園大学教授、宗教学、民俗学）、丸井 浩氏（東京大学教授、インド哲学）、頼住光子氏（東京大学教授、倫理学）。コメンテーターは、平田俊博氏（山形大学名誉教授、哲学）である。

（まえだ・せんがく、第四一回比較思想学術大会実行委員長、公益財団法人中村元東方研究所理事長）